

繰り上げ構文の派生と再構築効果について

佐藤英志

On the Derivation of Raising Constructions and Reconstruction Effects

Hideshi Sato

1. 序論

生成統語論研究の歴史において、繰り上げ構文(1)の派生と解釈の問題が広く論じられてきた。

(1) John seems to be nice.

この構文は、束縛再構築効果に関して興味深い振る舞いを示すことが知られている(Lebeaux (1991)、Lasnik (2003)等)。(2)–(3)に例示するように、wh移動で観察される束縛解釈の対比が、繰り上げ構文では消失する。

(2) a. Which picture of himself_i did John_i see t?
b. *Which picture of John_i did he_i see t?

(3) a. Pictures of himself_i seem to John_i [t to be blurry].

b. Pictures of John_i seem to him_i [t to be blurry].

本稿の主たる目的は、ミニマリスト・プログラム(MP)の枠組みで(2)–(3)のような再構築効果の対比を説明する仕組みを考察し、それと整合する最適な派生を主張することである。

本稿の構成は以下の通りである。第2節において、A移動における束縛再構築効果を考察する。コピー理論(Chomsky 1995)と派生

的アプローチ(Epstein et al. 1998)の問題点が、束縛条件適用のタイミングを精緻化することで解消されることを示す。第3節では、繰り上げ構文の派生として提案されている連続循環的移動(Bošković 2002)と一足飛び移動(Epstein and Seely 2006)の問題点を指摘する。第4節では、Collins (2005)の仮説が、第2節で論じる束縛条件のシステムを保持し、なおかつ第3節で指摘する様々な問題点を解決する最適な派生であることを主張する。第5節では、本稿の議論がもたらす理論的な意義と問題点を整理する。第6節で本稿を結ぶ。

2. 再構築効果再考

2.1 A移動における再構築効果

再構築効果は、Chomsky (1995)ではコピー理論の守備範囲とされている。コピー理論によれば、(2 a, b)は(4 a, b)の、(3 a, b)は(5 a, b)のLF表示で表される。¹

(4) a. Which picture of himself_i did John_i see which picture of himself_i

b. Which picture of John_i did he_i see which picture of John_i

(5) a. Pictures of himself_i seem to John_i [pictures of himself_i to be blurry]

b. Pictures of John_i seem to him_i [pictures of John_i to be blurry]

(4a)において、wh句のコピー内にある照応形 *himself* が *John* によってc統御されるため、束縛条件Aを満たす。²一方(4b)において、wh句のコピー内にあるR表現 *John* が *he* によってc統御されるため、束縛条件Cに違反する。

しかし(3)の事実はコピー理論からは導き得ない。たしかに(5a)では束縛条件Aを満たすc統御関係がコピー位置で成立している。しかし(5b)において、*John* が *him* によってc統御されるため束縛条件Cに違反すると誤って予測してしまう。Chomsky (1995)、Lasnik (2003)等はコピーが演算子変項関係の特性であり、従ってA移動はコピーを形成しないと仮定している。しかし(3a)の事実がこの仮定の反例となる。

この問題は束縛解釈の派生的アプローチ(Epstein et al. 1998)でも観察される。このアプローチでは束縛条件を派生の任意の段階で派生的に適用する。³これによれば、(2a, b)は派生のある段階でそれぞれ(6a, b)の構造を持つ。

- (6) a. $John_i$ see [which picture of himself]
 b. he_i see [which picture of $John_j$]

(6a)において *himself* は *John* によってc統御されており、この構造がLFで解釈されることから束縛条件Aを満たす。次に(6b)において、*John* が *he* によってc統御されており、この構造がLFで解釈されることから束縛条件Cに違反すると正しく予測される。

しかしここでもA移動が問題を提起する。

(3a, b)は派生のある段階でそれぞれ(7a, b)の構造を持つ。

- (7) a. [to $John_i$ [[pictures of himself] to be blurry]]
 b. [to him_i [[pictures of $John_j$] to be blurry]]

(7a)では *himself* が *John* によってc統御され、また(7b)では *John* が *him* にc統御されている。これらの構造がそれぞれLFで解釈

され、束縛条件が適用される。従って、(7a)では束縛条件Aを満たすと正しく予測されるが、(7b)では束縛条件Cに違反すると誤って予測されてしまう。

2.2 束縛条件とフェイズ

このようなA移動における再構築効果の問題は、束縛条件を同じ派生のタイミングで適用する限り、いずれのアプローチを採用しても解消されない。以下、本稿では基本的には派生的アプローチを採用することとし、この問題を回避する方策を提案する。

現在のMPの枠組みでは、Spell-Outはフェイズ単位で適用されると仮定されている。従って、束縛関係を含む解釈プロセスは、フェイズ単位で適用されると考えるのが自然である。しかし、束縛条件Aにはそれが適用される束縛領域が設定されている。Chomsky (1993)による定義は次の通りである。

(8) Binding Conditions

- a. If α is an anaphor, interpret it as coreferential with a c-commanding phrase in D.
 b. If α is a pronominal, interpret it as disjoint from every c-commanding phrase in D.
 c. If α is an R-expression, interpret it as disjoint from every c-commanding phrase.

束縛領域はGB理論期の統率範疇やMPの初期における完全機能複合(CFC)等で定義づけられてきたが、現在のMPの枠組みでどのように定義するかは必ずしも明らかではない。次の例を考えてみよう。

- (9) a. $Bill_i$ thinks that $John_j$ hurt himself_{i/j}.
 b. $John_i$ believes any description of himself.
 c. $Bill_i$ believes $John_j$'s description of himself_{i/j}.
 d. $Bill_i$ believes $John_j$ to like himself_{i/j} too much.

まず初めに、Arimoto and Murasugi (2005) で主張されているように、フェイズが照応形の束縛領域であると仮定してみよう。(9 a-d) は派生のある段階で、それぞれ (10a-d) の束縛領域を持つことになる (当面、DP もフェイズになると仮定しておく)。

- (10) a. [_{VP} John_i hurt himself_j]
 b. [_{VP} John_i believes any description of himself_j]
 c. [_{DP} John_i's description of himself_j]
 d. [_{VP} John_i like himself_j too much]

たしかにこの派生の段階でフェイズ内で束縛条件 A が適用されると仮定し、さらにフェイズ不可侵条件 (PIC) に従い照応形が上のフェイズからは見えない位置にあるとするならば、(9) の事実を説明することができるかもしれない。⁴しかし、次の例が問題となる。

- (11) John_i believes [_{CP} that [a picture of himself_j] will be on show at the exhibition].

この事実は束縛条件 A がフェイズを越えた領域で適用されており、かつ照応形が上のフェイズから見えない位置にあるにもかかわらず束縛条件 A を満たしていることを示している。それならば、(9 a, c, d) がそれぞれ (12a, b, c) の派生の段階にあるとき、vP フェイズで2つめの束縛領域を形成し、*himself* を c 統御する *Bill* を先行詞にすることができない理由はない。

- (12) a. [_{VP} Bill_i thinks that John_j hurt himself_{i/j}]
 b. [_{VP} Bill_i believes John_j's description of himself_{i/j}]
 c. [_{VP} Bill_i believes John_j to like himself_{i/j} too much]

この可能性を排除するためには先行詞の局所性を定義づける必要があるが、そもそも束縛領域とは先行詞の局所性を定義するための概念であり、これでは論理が循環してしまう。従って、

本稿ではフェイズが束縛領域であるとは考えず、次のように主張する。

- (13) 束縛条件 A の束縛領域は、先行詞になりうる要素の Merge で形成された範疇である。

このように仮定すると、(9) は (14) の、(11) は (15) の束縛領域 α を持つことになる。⁵

- (14) a. [α John_i hurt himself_j]
 b. [α John_i believes any description of himself_j]
 c. [α John_i's description of himself_j]
 d. [α John_i like himself_j too much]
 (15) [α John_i believes [_{CP} that [a picture of himself_j] will be on show at the exhibition]].

それぞれ束縛領域 α 内で束縛条件 A を満たしている。また束縛条件はあくまで束縛領域内で適用されるため、束縛領域が一旦形成されると、その内部にある限りそのままの解釈で凍結される。従って、(9) で示された束縛条件 A 違反のケースが説明されることになる。またこの定義によれば、DP がフェイズであると仮定する必要もないという利点がある。

これに対して、束縛条件 C には束縛領域という概念がない。従って、一般の解釈と同様に、フェイズ単位で解釈が行われると考えるのが自然である。本稿では束縛条件 C の適用を次のように定義する。

- (16) 束縛条件 C はフェイズが形成された段階で適用される。

次の例を考えてみよう。

- (17) *[He_i says [_{CP} that Mary loves John_i]]

この例では、最初の CP フェイズでは *John* を c 統御している要素がないので、このフェイズ内では束縛条件 C を満たしている。しかし、R 表現には束縛領域が関与しないので、次の主節

フェイズで循環的に束縛条件 C が適用されることになる。主節フェイズでは *he* が *John* を c 統御しているの、束縛条件 C 違反として正しく排除することができる。

2.3 再構築効果の説明

このように束縛条件の適用を規定したところで、再構築効果の説明に移ることにしよう。

(3) を (18) として再録し、(18a) の派生を (19) に、(18b) の派生を (20) に示す。

- (18) a. Pictures of himself_i seem to John_i [t to be blurry].
 b. Pictures of John_i seem to him_i [t to be blurry].
- (19) a. [α to John [[pictures of himself] to be blurry]]
 b. [_{VP} [pictures of himself] seem [α to John [t to be blurry]]]
- (20) a. [α to him [[pictures of John] to be blurry]]
 b. [_{VP} [pictures of John] seem [to him [t to be blurry]]]

(19a) において *himself* の先行詞となりうる経験者項 (Exp) が Merge されている。(13) の定義から、 α が束縛領域となる。従って α において束縛条件 A が適用され、この段階で束縛条件 A を満たすと予測される。次に (20a) において、*him* が *John* を c 統御しているもの、 α はフェイズではない。従って (16) の定義に従い、この段階ではまだ *John* に対して束縛条件 C が適用されない。次に派生が (20b) に進んだ段階で、_{VP} フェイズが形成される。

(16) の定義に従い、この段階で束縛条件 C が適用される。この段階では *John* は *him* によって c 統御されていないので、束縛条件 C を満たすと説明される。

この仮説は次のような例も上手く説明することができる。

- (21) John_i seems to himself_i to like Mary.

(21) は (22a, b) の派生を経る。

- (22) a. [to himself_i [John_i to like Mary]]
 b. [_{VP} John_i/t v [seems [to himself_i [t_i to like Mary]]]]

(22a) の段階では、まだフェイズは形成されていない。従って束縛条件 C は適用されない。また *himself* の束縛領域もまだ形成されていないので、束縛条件 A も適用されない。(22b) の段階で _{VP} フェイズが形成され、同時に *himself* の束縛領域 _{VP} も形成される。従ってこの段階で、束縛条件 A と束縛条件 C の両方が同時に適用される。*John* は *himself* を c 統御し、逆に *himself* は *John* を c 統御しない。従って束縛条件 A と束縛条件 C の両方が満たされることになる。

当然、この仮説は A' 移動の事実も正しく説明できなければならない。(2) を (23) として再録し、(23a, b) がそれぞれ (24a, b) の段階に達したと仮定する。

- (23) a. Which picture of himself_i did John_i see t?
 b. *Which picture of John_i did he_i see t?
- (24) a. [_{VP} John_i saw [which picture of himself_i]]
 b. [_{VP} he_i saw [which picture of John_i]]

(24a) において、*John* の Merge により *himself* の束縛領域 _{VP} が形成される。従って、*himself* はその束縛領域の中で *John* により c 統御されているため、束縛条件 A を満たす。(24b) において、_{VP} フェイズが形成されているため、この段階で束縛条件 C が適用される。*John* が *he* によって c 統御されていることから、束縛条件 C に違反すると正しく説明できる。

さらに、(25) では 2 通りの束縛解釈が可能である。(25) の派生を (26) に示す。

- (25) John_i wonders which picture of himself_i/John_j has bought.
- (26) a. [_{VP} John_i has bought which picture of himself_i]
 b. [_{IP} John_i wonders which picture of himself_i/John_j has bought t]]

(26a)の段階で、*John*のMergeにより *himself*の束縛領域が形成され、この中で *himself*は束縛条件Aを満たす。さらに派生が進み、(26)の段階で2つめの束縛領域を形成する。この新しく形成された束縛領域において *himself*が *John*と同一指示を持つことになる。ここで(14)–(15)との違いが重要となる。(14)–(15)の説明では、照応形に対する束縛領域が形成された後、派生を通じて照応形が束縛領域内にとどまっていたため、解釈が凍結されていた。しかし(25)は *wh*句が移動することで(26a)の束縛領域を逃れている点が異なる。

また次に例示する心理動詞構文における束縛解釈の事実が、ここでの仮説の妥当性を裏付ける。

- (27) Pictures of himself_i worry John_i.
(Belletti and Rizzi 1988 : 317)
(28) Pictures of John_i worry him_i. (Endo and Zushi 1993 : 42)

Belletti and Rizzi (1988)で仮定されている構造を採用し、(27)の派生として(29)を、(28)の派生として(30)を仮定する。

- (29) a. [VP [v' worry [DP pictures of himself]_i] John_i]
b. [VP [DP pictures of himself]_i v [VP [v' worry t_i] John_i]]
(30) a. [VP [v' worry [DP pictures of John_i]] him_i]
b. [VP [DP pictures of John_i]_i v [VP [v' worry t_i] him_i]]

(29a)において、*himself*は *John*がMergeした時点で束縛領域が形成され、ここで束縛条件Aが適用される。従って、(29a)において束縛条件Aを満たすと説明される。これに対して(30a)において、*John*は *him*によってc統御されているものの、まだフェイズが形成されていない。従って、(30b)の段階で *vP* フェイズが形成された時点で束縛条件Cが適用されることとなり、この段階ではすでに *John*が *him*によってc統御されていないので、束縛条件Cを満たすと正しく予測される。

3. 繰り上げ構文の派生

3.1 連続循環的移動

次に繰り上げ構文の派生に視点を移してみよう。従来、繰り上げ構文における主語は連続循環的に移動すると仮定されてきた。

- (31) John_i seems [t_i' to be t_i nice].

Chomsky (1995, 2000, 2001)は、この移動が埋め込まれた非定形節主要部のEPP特性により引き起こされると主張している。しかし、Bošković (2002, 2007)は様々な経験的事実から、非定形節主要部にはEPP特性がないと論じている。Boškovićは主語の連続循環的移動そのものは認めており、この移動の動機はTakahashi (1994)の最小連鎖連結原理(MCLP)であると主張している。

しかしこの仮説には幾つかの問題がある。以下の派生を考えてみよう。

- (32) a. [r' I [seem [IP to be John nice]]]
b. [r' I [seem [IP John_i [r' to be t_i nice]]]]
c. [IP John_i [r' I [seem [IP t_i' [r' to be t_i nice]]]]]

(32a)の派生の段階で *I*がMergeされ、この時点で初めて *John*が移動する動機が生じる。しかしMCLPを満たすべく(32b)の派生を経由してしまうと、拡張条件に抵触してしまう。この問題を回避する方法は、拡張条件をForm Chainに適用することである。即ち派生が(32c)の最終段階に至ったところでForm Chainを適用すれば、構造の一番上の部分で構造が拡張されているため、連鎖全体としては拡張条件を満たすことになる。しかし、Epstein and Seely (2006)では、連鎖という概念そのものに理論的問題があることが指摘されている。従ってForm Chainは破棄されることが望ましい。この見通しに従えば、次のようにMCLPを満たすという理由のためだけに、非定形節指定部への移動を駆動しなければならない。

- (33) a. [to be John nice]
b. [John_i to be t_i nice]

しかし、この移動の段階ではまだ Probe が派生に導入されていないため、移動が Last Resort に違反し、さらに先読みという計算コストの問題を生じさせてしまう。⁶

3.2 一足飛び移動

Epstein and Seely (2006) は、繰り上げ構文の主語が一足飛びに主節位置に移動すると主張する。

(34) John_i seems [to be t_i nice].

この仮説によれば、Bošković の主張で問題とされる Last Resort、Form Chain、拡張条件および先読みの問題も生じない。しかし、(35) の対比が問題となる。⁷

(35) a. Mary_{1A} seems to John [t_i' to appear to herself [t_i to be in the room]].

b. *Mary₁ seems to John_i [t_i' to appear to himself [t_i to be in the room]].

Bošković (2002) によれば、(35) の対比は中間痕跡位置に照応形の局所的な先行詞が生起することから説明可能である。これに関して、Epstein and Seely (2006) は Torrego (2002) の分析を応用することでこの問題が回避できると主張する。この分析では、Exp は初期 Merge の段階では PP であり、これが格照合の理由で主節 TP よりも高い位置にある機能範疇 XP の指定部に covert に移動した結果、その範疇が DP に変化すると仮定する。これによると (35a) の派生は (36) に、(35b) の派生は (37) に表すとおりである。

(36) a. [seems [PP to John] [to appear to herself [Mary_i to be in the room]]]

b. [TP Mary_{1A} seems [PP to John] [to appear to herself [t_i to be in the room]]]

c. [XP John [TP Mary_{1A} seems t_{John} [to appear to herself [t_i to be in the room]]]]

(37) a. [seems [PP to John]_i [to appear to himself

[Mary_i to be in the room]]]

b. [TP Mary_i seems [PP to John]_i [to appear to himself [t_i to be in the room]]]

c. [XP John_i [Mary_i seems t_{John} [to appear to himself [t_i to be in the room]]]]

(36a) および (37a) において、Exp の John は PP に支配されているため、埋め込み節内部を c 統御しない。(36b) および (37b) の段階で主語に移動が適用され、主語が照応形を c 統御する位置に生起する。次に (36c) および (37c) の段階で Exp の John が機能範疇 XP 指定部に移動して DP となり、照応形を c 統御する。(36c) では先行詞 Mary が herself を最も近い位置から c 統御しているため、束縛条件 A を満たすと説明される。これに対して、(37c) では先行詞 John よりも近い位置に Mary が介在しているため束縛条件 A に抵触すると説明される。

しかしこの仮説の最大の問題点は、派生的アプローチでは非顕在的な移動が許されないことである。Spell-Out によって PF と LF に同時に構造が送られるため、フェイズの edge 位置にある場合を除いては顕在的に具現している位置で解釈されるからである。

次節では束縛再構築の説明を維持し、なおかつ連続循環的移動と一足飛び移動で生じる問題を克服するシステムを考察する。

4. 繰り上げ構文の外置分析

4.1 MLC 問題

繰り上げ構文の派生が関与する問題に、最小連結条件 (MLC) がある。次の例を考えてみよう。

(38) They₁ seem to him [to t_i like John].

この例は、すでに第2節で考察したように、束縛条件 C に従い him と John が別支持であると解釈される。この解釈が成り立つためには、him が非定形節内部を c 統御する位置になければならない。しかし、主語が主節位置へ移動するためには、MLC を遵守する必要がある。このためには him が非定形節内部を c 統御してはな

らない。即ち、*him* と非定形節は、束縛と MLC に関して全く相反する c 統御関係が要求されている。

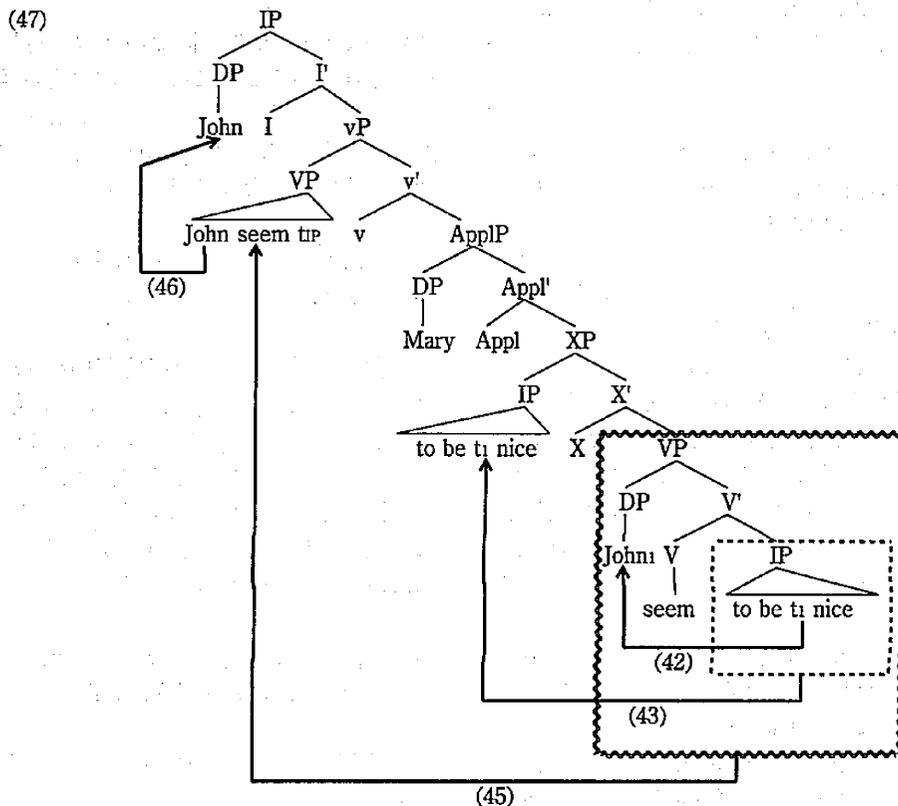
4.2 Collins (2005)

この問題は繰り上げ構文に外置が適用されていると仮定することで説明できる。外置は伝統的には右方移動により形成されると論じられてきたが、この分析は Kayne (1994) の線状一致の公理 (LCA) とは矛盾する。この矛盾は Collins (2005) の左方移動分析を採用することで回避可能である。この分析では、(39) は (40) – (46) のように派生される。

- (39) John seems to Mary to be nice.
- (40) [IP to be John nice]
- (41) [VP seem [IP to be John nice]]
- (42) [VP John_i [v' seem [IP to be t_i nice]]]
- (43) [XP [IP to be t_i nice] [x' X [VP John_i [v' seem t_i]]]]
- (44) [AppIP Mary [AppI' Appl [XP [IP to be t_i nice]]]]

- [x' X [VP John_i [v' seem t_i]]]]
- (45) [VP [VP John_i [v' seem t_i]]][v' v [AppIP Mary [AppI' Appl [XP [IP to be t_i nice] [x' X t_iVP]]]]]]
- (46) [IP John_i [I' I [vP [VP t_i' [v' seem t_i]]] [v' v [AppIP Mary [AppI' Appl [XP [IP to be t_i nice] [x' X t_iVP]]]]]]]]

(40) のように非定形節を形成した後、これを *seem* と Merge する (41)。次に主語を V 指定部に繰り上げ(42)、その後主語の痕跡を含む非定形節を機能範疇 X の指定部に移動する (43)。この (43) の移動が従来の外置に相当する。次に *Applicative* と XP を Merge し、Exp を *Applicative* 指定部に Merge する (44)。次に *v* を *AppIP* に Merge して、X 補部の VP を *v* 指定部に移動する (45)。この移動によって主語を含む VP が Exp からの c 統御領域の外に移動することになる。そして最後に VP 内の主語を主節主語位置に繰り上げる (46)。以上が Collins による繰り上げ構文の派生である。この一連の派生を図示すると次のように表される。



この派生において、(45)の移動により主語を含むVPが繰り上がっているため、(46)の主語の移動の際に主語はすでにExpからのc統御領域の外にある。従ってMLCには抵触しないと説明される。またこの分析の重要な点は、派生が全て循環的に行われていることである。従って、Last Resort、Form Chain、拡張条件、先読みという連続循環的移動で生じた問題はここでは発生しない。

4.3 外置分析による説明

この派生を仮定することの妥当性は、第2節で論じた再構築効果の説明と整合性があることから支持される。(18)を(48)として再録し、再考してみよう。

- (48) a. Pictures of himself_i seem to John_i to be blurry.
 b. Pictures of John_i seem to him_i to be blurry.

(48a)の派生の一部を(49)に示す。(49)は(44)に相当する派生の時点で達した段階である。

- (49) [AppI^P John_i [AppI' Appl [XP [IP t_i to be blurry] [X' X [VP [pictures of himself]₁ [v' seem t_{IP}]]]]]]]

この段階で *himself* をc統御する先行詞 *John* が Merge されている。従って(13)の定義から、この時点で束縛領域 *AppI^P* が形成される。この束縛領域の中で *John* が *himself* をc統御しているので束縛条件Aを満たすと正しく予測される。つぎに(48b)は以下に示すような派生を持つ。(50)は(44)に相当する派生の段階であり、(51)は(45)の移動が適用された段階である。

- (50) [AppI^P him_i [AppI' Appl [XP [IP t_i to be blurry] [X' X [VP [pictures of John]_i [v' seem t_{IP}]]]]]]]
 (51) [VP [VP [pictures of John]_i] [v' seem t_{IP}]] [v' v [AppI^P him_i [AppI' Appl [XP [IP t_i to be

blurry] [X' X t_{VP}]]]]]

ここでChomsky (2000, 2001)に従い、vPとCPがフェイズになると仮定する。(50)において *John* が *him* によってc統御されているものの、まだ両者を含むフェイズは形成されていない。従って(16)の定義から、この段階ではまだ束縛条件Cは適用されない。派生が(51)に進んだ段階で、vPフェイズが形成され、この段階で束縛条件Cが適用される。この段階ではすでに *John* が *him* のc統御領域の外にあるので、束縛条件Cを満たすと正しく説明することができる。

さらに一足飛び移動で問題とされた(35)の事実もこの派生から説明できる。(35)を(52)として再録する。

- (52) a. Mary_i seems to John [to appear to herself [to be in the room]].
 b. *Mary₁ seems to John_i [to appear to himself_i [to be in the room]].

この例はCollinsの分析でいえば、外置が2回適用されていることになり、派生構造は多少複雑である。まず初めに(52a)の派生は以下の通りである。(53)は *appear* を述語とする非定形節が形成された段階である。

- (53) [VP [VP Mary_i [v' appear ...]] v [to herself to be in the room]]

この段階では *Mary* はv指定部内のVPに含まれているため、*herself* をc統御する位置にはない。従って *herself* の束縛領域はこの段階ではまだ形成されない。さらに派生が進み、(54)の段階を経る。この段階では(53)で形成された非定形節が、上の述語 *seem* の補部として Merge された段階である。

- (54) [VP seem [VP [VP Mary_i [v' appear ...]] v [to herself to be in the room]]]

この段階からさらに *Mary* が *seem* の指定部に繰り上がる。

- (55) [vP Mary₁ [v' seem [vP [vP t₁ [v' appear ...]]
v [to herself to be in the room]]]]

この段階で *Mary* は *herself* を c 統御する位置に初めて生じたことになる。ここで *herself* の束縛領域 VP が形成され、この段階で束縛条件 A が適用される。そして束縛条件 A を満たすと正しく予測される。

つぎに (52b) も (53)–(55) と同じ派生を経て、(56)–(58) の段階に至る。

- (56) [vP [vP Mary [v' appear ...]] v [to himself to be in the room]]
(57) [vP seem [vP [vP Mary [v' appear ...]] v [to himself to be in the room]]]
(58) [vP Mary₁ [v' seem [vP [vP t₁ [v' appear ...]]
v [to himself to be in the room]]]]

(58) において、*Mary* が V 指定部に繰り上がった段階で束縛領域 VP が形成される。この場合 *Mary* は *himself* とは同一指示になり得ないので束縛条件 A に違反すると正しく予測可能である。

5. 理論的帰結と今後の課題

以下、本稿における分析がもたらす理論的帰結と今後の課題を述べる。本稿では、Collins (2005) の派生を仮定することで、(52) のような連続循環性を示す事実が説明できることが示された。少なくともこの意味において Bošković (2002) を支持する経験的証拠がなくなる。しかし、Bošković (2007) では Probe-Goal システムによる連続循環的移動の修正が検討されており、概略、Ormazabal (1995) に従い非定形節が CP (従ってフェイズ) であると仮定し、主語の解釈不可能な格素性がそれと一致する Probe を求めて、フェイズの外から見える edge 位置に自立的に移動すると主張している。この仮説の検証が今後の検討課題となる。いずれにしても、理論的には連鎖形成を破棄する方向性にあることは確かであり、Nunes (2004) におけるコピーの PF 具現および寄生空所構文の説明等、連鎖に基づく仮説の検証が今後の課題となるであろう。次に、本稿では派生的アプ

ローチに基づき再構築効果を含む束縛解釈のパラダイムが過不足なく説明できることを論じた。この試みが妥当である限り、コピー理論は破棄可能である。ここで問題となるのが、次のような事実である。

- (59) a. Every coin is 3 % likely to land heads.
(every coin > likely) (Lasnik 2003:154)
b. Some politician is likely to address
John's constituency. (ambiguous)
(May 1977:189)

これらの事実を派生的アプローチでどのように説明するべきか、今後の研究課題としたい。

6. 結語

以上、本稿では再構築効果に関する A 移動と A' 移動の振る舞いの違いが、束縛条件適用のタイミングの違いに還元されることを論じた。束縛条件 A は束縛領域形成の段階で適用されるのに対し、束縛条件 C はフェイズ形成の段階で適用されるとの仮説を提案した。この仮説が再構築効果を含む様々な束縛解釈を説明できることを観察し、この仮説の妥当性を裏付けた。また繰り上げ構文の派生として提案されている連続循環的移動と一足飛び移動の問題点を指摘し、これらの問題点が Collins (2005) で提案されている派生を仮定することで解消されることを論じ、この派生の妥当性を主張した。最後に連鎖形成とコピー理論を破棄する可能性について言及した。

註

- 元位置のコピーをイタリック体で表す。本稿では、同一指示関係にある要素を説明の便宜上下付指標で表す。
- MP の枠組みでは束縛条件は解釈規則として規定されている。本稿では、指標で表された束縛関係が束縛条件から導かれる予測と合致するとき、束縛条件を満たすと表現する。
- Epstein et al. (1998) は派生的束縛条件を次のように定義している。
(i) The application of "disjoint" interpretive procedures occurs at every point of the

derivation, whereas the application of "anaphoric" interpretive procedures occurs at any single point of the derivation.

(Epstein et al. 1998 : 62)

4. PIC の定義は次の通りである。
- (i) The domain of H is not accessible to operations outside HP; only H and its edge are accessible to such operations. (Chomsky 2001 : 13)
5. 本稿の仮説では次の例が説明できない。これについては今後の検討課題とする。
- (i) *John_i believes that himself_i is the best.
6. Bošković (2007) は MCLP を Probe-Goal システムで修正することを提案している。これについては第5節で言及する。
7. Bošković (2002, 2007) は中間痕跡があることの証拠として以下のような事実を挙げている。
- (i) The students seem all to know French.
- (ii) a. *[His_i mother_j's bread]_i seems to her_j t_i' to be known by every man_i t_i to be the best there is.
b. [His_i mother_j's bread]_i seems to every man_i t_i' to be known by her_j t_i to be the best there is.
- Epstein and Seely (2006) は、(i) については遊離数量詞を副詞として分析し、その生起は副詞の分布の特性から導かれると主張している。また (ii) に関しては、これが中間痕跡位置を仮定する証拠にはならないと論じている。本稿の仮説でこれらがどのように説明されるかの検証は、今後の検討課題とする。
8. Collins はこの移動を smuggling (密輸) と呼んでいる。

参考文献

- Arimoto, Masatake and Keiko Murasugi (2005) *Sokubaku to Sakujo*, Kenkyusha, Tokyo.
- Belletti, Adriana and Luigi Rizzi (1988) "Psych-Verbs and (Theta)-Theory," *Natural Language and Linguistic Theory* 6, 291-352.
- Bošković, Željko (2002) "A-Movement and the EPP," *Syntax* 5, 167-218.
- Bošković, Željko (2007) "On the Locality and Motivation of Move and Agree: An Even More Minimal Theory," *Linguistic Inquiry* 38, 589-644.
- Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2000) "Minimalist Inquiries: The Framework," *Step by Step*, ed. by Roger Martin, David Michaels and Juan Uriagereka, 89-155, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2001) "Derivation by Phase," *Ken Hale: A Life in Language*, ed. by Michael Kenstowicz, 1-52, MIT Press, Cambridge, MA.
- Collins, Chris (2005) "A Smuggling Approach to Raising in English," *Linguistic Inquiry* 36, 289-298.
- Endo, Yoshio and Mihoko Zushi (1993) "Reply to Rizzi: Binding and the Minimalist Program," *Argument Structure: Its Syntax and Acquisition*, ed. by Heizo Nakajima and Yukio Otsu, 36-46, English Linguistic Society of Japan, Tokyo.
- Epstein, Samuel David, Eric M. Groat, Ruriko Kawashima, and Hisatsugu Kitahara (1998) *A Derivational Approach to Syntactic Relations*, Oxford University Press, Oxford.
- Epstein, Samuel David and T. Daniel Seely (2006) *Derivations in Minimalism*, Cambridge University Press, Cambridge, UK.
- Kayne, Richard S. (1994) *The Antisymmetry of Syntax*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Lasnik, Howard (2003) *Minimalist Investigations in Linguistic Theory*, Routledge, London and New York.
- Lebeaux, David (1991) "Relative Clause, Licensing, and the Nature of the Derivation," *Syntax and Semantics: Perspectives on Phrase Structure: Heads and Licensing*, ed. by Susan Rothstein, 209-239, Academic Press, San Diego.
- May, Robert (1977) *The Grammar of Quantification*, Doctoral dissertation, MIT, Cambridge, MA.
- Nunes, Jairo (2004) *Linearization of Chains and Sideward Movement*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Ormazabal, Javier (1995) *The Syntax of Complementarization: On the Connection between Syntactic Structure and Selection*, Doctoral dissertation, University of Connecticut, Storrs.
- Takahashi, Daiko (1994) *Minimality of Movement*, Doctoral dissertation, University of Connecticut, Storrs.
- Torrego, Esther (2002) "Arguments for a Derivational Approach to Syntactic Relations based on Clitics," *Derivation and Explanation in the Minimalist Program*, ed. by Samuel D. Epstein and T. Daniel Seely, Blackwell, Oxford.